



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	討議：パネルディスカッション
Description	北海道大学入試改革フォーラム2018. 2018年5月21日. 北海道大学学術交流会館(札幌). 北海道大学アドミッションセンター主催, 北海道大学高等教育推進機構 高等教育研究部 高等教育研究部門共催
Issue Date	2018
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/86334
Type	other
File Information	5_Discussion.pdf



討 議

ーパネルディスカッションー

(司会)

それでは、第三部総括討論に入りたいと思います。基調講演、現状報告をしていただいた4名の先生方をパネリストにお迎えし、先ほどみなさまからいただいた質問を適宜紹介しながら総括的な討論を進めて参りたいと思います。

コーディネーターは北海道大学アドミッションセンターの藤田副センター長、及び北海道大学高等教育推進機構の鈴木誠教授のお二方です。よろしくお願いいたします。

(藤田)

それでは、総合討論のパネルディスカッションに入りたいと思います。私はアドミッションセンターの副センター長藤田でございます。

(鈴木)

鈴木でございます。よろしくお願いいたします。

(藤田)

それでは、早速今の休み時間の間にみなさんからいただいた質問を皮切りに、それぞれパネラーの方々にいただいた質問をうかがっていきたいと思います。

最初は、本日は高校からの参加者が非常に多いとうかがっておりますが、やはり一番気になるのは、例えばアドミッション・オフィサーを設定して多面的・総合的、後の方のご講演でAIを使って多面的な評価を大学が評価をおこなうとなったときに、それが高校の教育にどういうふうに影響していくか、あるいは、高校の教育に対してどういうことを期待するか、そういった視点でみなさまに一言ずついただきたいと思います。特に、大学の入試制度は高校の教育に非常に強く影響しますのでこういう方法論を取り入れることはいろんな影響を与えていくと思われまますので、そういう視点で順に川嶋様のほうからお願いできればと思います。



(川嶋)

もともと今回の高大接続改革というのは先ほど山本先生からもお話しがありましたが、高校を変える、大学を変える、その両者をつなぐ入試も変えるということで、別の言い方をすれば入試を変えれば高校教育も変わるだろう、大学も変わるだろうというところから始まった。ただ、元々は入試をなぜ変えるかといったときに、入試にあまりにも色々な機能が集約されすぎている、と。高校教育の質の保証であったり、もちろん入学者選抜という機能であったり、あるいは逆に大学の入口の質の保証であったり。いろんな機能が大学入学者選抜に集約されすぎているので、それぞれ三者の役割を見直し、それぞれの役割を今以上に果たすようにしましょうということで、高校はきちんと高校教育の質の保証をしてください、大学はきちんと大学教育の質の保証をしてください。そして入試はこれまでの二極化している学力偏重ないしは学力不問の入試ではなくて高校生が学んできた色々な側面を評価するように変えましょう、というお話しで始まったと私は理解しています。ところが最近の具体的な議論では、例えば英語4技能に関する外部試験の導入というのは高校での英語教育を変えるためには今までの2技能ではなくて、4技能の入試に変えないと英語教育の改善が進まないとか、あるいは、共通テストでの記述式

についても書く力を今まで以上に身につけないといけないので、共通テストで導入しましょうということで、当初の改革の趣旨からずいぶん離れてしまった議論が進んでいると思います。もちろん、入試方法が変われば、高校教育も変わらざるを得ないし大学教育も変わりますが私からのメッセージは入試のために高校教育があるわけではないとぜひ高校の先生には理解して欲しいと思います。つまり高校教育の先に入学試験があるのであって、入試があるから高校教育が変わらなければならないのではない。ですから、大学としては高校で学んだことをきちんと正當に評価できるような入試に変えていくと。そのために高校がどう変わらないといけないというのは本末転倒の議論ではないかなと。これはあくまでも個人的な意見ですよ。以上です。

(松村)

僕は前の会社も含めて人事の人が、要するに会社側がどんな人を採用するかということはずっと見てきてました。基本的に学校でスコアを付けたGPAでは無い観点で採用される現実、その後、成長される現実を見てきて、採用におけるそのような観点がなんで学校教育の中に含まれないんだろう、なんで学校教育の中で評価されないんだろうと思ってきました。大学もそうだし、もっといえば高校時代もなんで評価されないんだろうと。対人・対自己・対課題基礎力とか思考する力とかそういったものがなぜいれなかつたり、取り沙汰されなかつたり、教育の中で強調されないんだろうとずっと思っていたんですが、ようやく最近になって大学はけっこう考えているという現実が見えて来た。今度の入試改革で高校教育の中に顕在化して見えるようになるのかなと。それを入試のジャッジのところはどう判断するかという問題は置いておいても、高校の中でこういうことを顕在化して教育されることは非常に有意義なことだと思います。

(山本)

私も川嶋先生と同じ意見を持っており、先ほどお話ししたとおり、受験に動機づけられた学力

ではなく、高校の教育課程の中でしっかり教育カリキュラムが行われていて、その学びの成果を見てみたいと思って入試を作っています。多面的・総合的評価のために高校教育がまた対策に走る教育にならないよう、学習指導要領に沿った教育展開を進めていただきたいと思っています。

そして、その新しい教育課程で強調している表現力や判断力等を測定する入試開発を各大学で行われておりますので、それも含めて教育課程に則った教育がなされることを期待したいと思いません。

(福原)

私は3点ですね。1点目は社会との一致性、2点目が可視化、3点目が個別化というところが変わってくるのかなと思います。先ほど先生がおっしゃっていたように大学の試験のために高校教育があるわけではない。でもじゃあ何かの基準が必要。世界はどのようになっていくのだとか、今、現状の社会がどのような人材が必要とされているのか、ある意味、大学も変わらなくてはならないし、こうした情報をもって高校も教育内容を変えないといけない。もっともっと社会のニーズを大学や高校が入れていかないと世界に比べると明らかにここは厳しいのかなと。そこをビッグデータやAIは、この基準を明らかにしていく力がある。2点目が可視化。AO入試が存在するとしたときに、例えば高校の先生方とお話ししたときに、この子がここになんで受かったのか分からないんだといいます。そうするとアドミッション・ポリシーがあるんだけど、必ずしも全部の面接官がアドミッション・ポリシーにきれいに沿っている訳ではないので、結果として高校の現場にしてみるとよく分からない。こういうようなところをもっとデータ化してしまえばもっと明確に分かってくる。こうしたデータ化、AI化というのは、説明責任を明確化する。これは実は企業から大学に対してやろうとしていることと同じなんです。そういう説明責任を果たすことができるのではないかな。最後の個別化なんですけど、ビッグデータは個のことをより分かるようになる、と。さらに今ま

で単に教えている学力のナレッジトランスファーというところは、AIツールやさまざまなツールを使えば先生なんていらなくなる。そうなってくると、ファシリテーターとしての先生の役割が、個々のニーズに沿った役割というのが時代とともに出てくるのではないのでしょうか。

(藤田)

はい、ありがとうございます。今のお話をうかがっていると、こういう多面的な評価を行うことで高校が変わるといよりも大学のほうが変わらないといけないのではないかと。結局、大学入試のためではないもっと将来のための勉強が重要だというのがご講演いただいた内容であって、そういう学びを受け入れる、推進する、そういう入試とか大学の考え方が重要で、むしろ大学のほうが変わらないといけないのではないかと、というふうに感じました。

それでは、もう一つ全体的なみなさま共通の質問をさせていただきたいと思います。

eポートフォリオに関することです。eポートフォリオに対するそれぞれの見解を教えてください。

川嶋様からお願いします。

(川嶋)

先ほど私の講演でも、阪大でもeポートフォリオ型のWEB出願システムの開発を考えているとの話をしました。実際にWEB出願はAO・推薦入試で実装していて一般入試についても来年年明けの31年度入試ではWEB出願を全面的に導入することになっております。eポートフォリオについては主体性の評価が重視されるのであれば、単に活動の成果だけではなくて、先ほど山本先生のお話にもありましたが、どういうきっかけでそういう活動を始めたのか、要するにアウトプットだけではなく、プロセスもきっちり情報化できるようなポートフォリオにしないと、つまり例えば全国大会で1位になりました。それは自分が興味関心があったのでそういう大会に参加して全国大会に参加して1位になったのか、先生が「おまえはこ

れが得意だから出る出る」と言われて、結果として1位になったのではまったく違う。eポートフォリオと言った場合にプロセスまでを評価できる、そういう情報を盛り込めるポートフォリオにしていけないと、大学入試では活用できない。ただし、プロセスから、例えば高校1年生からこういう活動を始めましたとどんどん入力し、その情報が個々の大学の出願に結びついているとこれは今の日本の入試制度から行くと、要するに青田買いになるわけです。高校1年生から大学のポートフォリオに入れていくとその大学でしか活用されないということになるので、もしプロセスを重視したポートフォリオになると大学間で共有できるものにしないといわゆる公平性、受験機会の平等、公平性というのは保証できない。ちなみにアメリカでは2年前からコアリションというコモンアプリとは違う出願システムができましたけど、これは中学2年くらいから誰もがそのポートフォリオにどういう活動を行ってきたかを入力できて、高校の先生や地域の人や大学の先生がポートフォリオの中身を見て、「キミはこういうところは強いけど、こういうところが弱いからこういう活動をした方がいいよ」という育成型の出願WEBを作りました。そういう形がある。これは今、100大学くらいがそういう形を採用している。

(松村)

僕も学習の履歴を質のデータとして扱うならば非常に意味があると思いますが、あれを量的に扱おうとしたときに意味のないものになるのではないかと思います。大学でも今、eポートフォリオというのが導入されています。その情報を就職のときに使いますかと企業にヒアリングしていくと、使うという。どうやって使うかという、点数化するわけではなく、面接を高度化したいと思っている。エントリーシートでは学生側の一辺倒の回答しか得られない。そうではなくて、この力はどこで付いたのと探りに行きたいわけです。しかし、人事側にはそのネタがない。ネタを出して欲しい。そこはポートフォリオの中にいっぱいあるのに出てこないという問題がある。そのよう

なことから考えて質的なデータとして面接で使われるのは意味があるというふうに思います。

(山本)

先ほど私が申し上げたとおり、スペックではなくストーリーを重視したいと思います。もうひとつお話ししたいのは、環境が違くとアウトプットされる成果は異なってきます。特にeポートフォリオで取り上げるような学外、校外での実績となると、これは完全に環境依存の世界になります。高校生はそのチャンスを自分で創出するのはなかなか難しいと私は思います。大学生くらいだと自分自身でアルバイトをしたりして、経済的なことを自分で補完したりしながらできるでしょうが、高校生は親の支援や周りの大人の支援がないと特別な機会の創出が難しい。それをどう評価するかという事態になりかねないなと思っています。例えば隣国の韓国の場合、韓国もeポートフォリオをやっていますが、そこには必ず背景、つまり家族構成や地域、生活環境等も記載するようになっています。そうすれば、そのような状況の中でこれだけの成果を上げている、という評価につなげられる。だから、外部試験については一切入試の判定に使わないことになっています。なぜかという、環境は周囲から与えられたもので、多くの高校生は自分から開発をしてそこにいるわけではないという前提があるからです。ですので、家庭の経済状況や土地、地域によって影響を受けるものは、判定から除外、あくまでも受験生自身で主体的に開発した力やスキル等で判定することになっています。この捉え方は、すばらしいなと思っております、反対になぜ日本はこんなに資格とか受賞とか学外の活動を入試に使おうとするのかと不思議な気がしています。

(福原)

私はいまのeポートフォリオのしくみであれば、大学入試で利用するには最低10年、短期的にはまったく役に立たないと思っております。なぜか。ビッグデータ、人工知能的発想から申し上げたいと思うのですが、まず、今おっしゃったように体系データとか行動ログとか今のeポートフォリオ

はぜんぜん取る形になっていない。データを10年くらい貯めていき、その学生がどういうふう成長していったか、本当にその生徒の行動が意味があったのか、ここまでを分析しないといけない。ただこの分野に関してディープラーニングというのは非常に強い力を持っているので、ディープラーニングをしっかりと分かる人間がeポートフォリオを構築して、かつ10年間というスパンでデータを構築して使い込んでいけば、最終的に10年後にはかなりのレベルで、人間に負けることのないレベルでできるのではないかと仮説は持っています。短期的にeポートフォリオが使いものにならないので、情報量で360度評価に一気に切り替えた。結局eポートフォリオは評価が目的。しっかりそこができていけばいいと考えたのでeポートフォリオを使った人工知能、ディープラーニングを使ったモデルよりも、もう少し簡易的な方がラクではないかと考えた経緯があるのです。今のままだとそう簡単には使えない。人工知能・ビッグデータの視点からの意見です。

(藤田)

今の福原さまのご説明、ちょっと私の質問なんですけど、高校側の方からの質問の中から、今までは受験という軸があって、教育ができていた。そういうふう新しい多面的な評価を行うと、どういうふうな軸で高校の教育をやっていったらいいのか、というご質問をいただいていたのですが、本当に学習指導要領通りにやるのがAIの判定する結果ともズレる場合があると思うのですが、そのあたりはいかがでしょうか？

(福原)

実は私たちもそのあたりは経産省さんですか、文科省さんと話しているところなのですが、今の日本の学力に関する方向はすばらしい。そうでなければ日本はこんなにすごい国になっていない。それは必要だ。ただ、ここの部分であればAIが比較的置き換えやすい分野。知識を覚えていく、その分野だけだったらキツイ。それをどう応用するかといったところでコンピテンシーとかが重要になっていて、それを文科省も理解して

いるのでアクティブラーニング。よくアクティブラーニングを学力の方に使うと全然うまくいかないのですが、知識の応用の方にアクティブラーニングを使うと効く。そこを文科省も理解していてアクティブラーニングをやる。そのアクティブラーニングで入れているような、知識を応用するということを高校が必要になってくる。ところがそれを入れている高校さんにしてみると、大学はそれを評価してくれてないんじゃないか。確かに大学入試を目的としていないので、やっぱり大学入試で結果を出さないと親御さんが子どもを次に通わせてくれないと結果として経営が厳しくなるというリアリティがある。そこのところを可視化していくとか、そこを評価する。先ほどのダビンチ入試は本当に素晴らしいと思うのですが、そういう違うストーリー、しっかり頑張っている子たちにはちゃんとそれが応用できるということを見せていく。そこはセットになって初めて今の先生たち、一部の先生方が取り組んでいるアクティブラーニングがワークするのかな。今までの学力も必要でしょうし、そうじゃない新しい部分も必要で、かつそれが産業界からのデータが常にアップデートしてやっていくということが必要なかなと思っている。

(藤田)

もう一ついいですか？今の話しの続きのような話になるのですが山本様にお聞きしたいのですが、実際にダビンチ入試を実施する、非常にいいというのは分かる。どうしても物理的に時間がかかる、大きな労力がかかると。特に一部に対して適応するのはいいですけど、だんだん母体を大きくしていく、そうすると非常に現実的な難しさが出てくると思うのですがそのあたりはどういう展望をもっていらっしゃるのでしょうか？

(山本)

まず評価者について。本学のダビンチ入試は現在、受験者が400名前後です。本学は1学年約600名の大学ですので小さいからできるんじゃないかとよく言われるのですが、実はそうではありません。私は韓国の大学入試制度を研究している人間

ですが、韓国の場合の入学査定官制度ですと受験生2万～3万人ぐらいいに対して、査定官70人体勢でやっています。それから考えるとある程度人数を増やせば、できます。しかし、簡単に評価者の人数を増やせるかというところではなく、韓国の場合は、判定の質を担保するために、アドミッション・オフィサーである入学査定官は、制度開始当初、年間120時間程度の研修を受けていました。また、不足した人材に対して、査定時期に採用する委託査定官がいます。学内の教員をはじめ学外の教育関係者がそうで、その人材に対しても経験の有無に応じて、30時間や60時間といった研修を課します。本学の場合も、事前研修があり、私とその講師の役割をしています。

(藤田)

アドミッション・オフィサーのことで川嶋様への質問ですが、先ほどの講演にも出てきた内容かも知れませんが、アドミッション・オフィサーのセミナーにはどのような職種の人が参加しているのか？それからアドミッション・オフィサーという専門職で将来的にそういうことを仕事にした雇用というのがあるのか、という質問がひとつ。それからアドミッション・オフィサーの育成のプログラムで入試データの分析方法を学ぶプログラムはあるのでしょうかというご質問をいただいております。

(川嶋)

これまでのセミナーやプログラムの参加者ですが、教員・職員・大学院生の方々が参加されています。所属大学も国立・私立を問わず幅広く参加されています。将来のことですが、アドミッション・オフィサーと呼ぶか呼ばないかは別として、アドミッション・オフィサーとしてどういう仕事を期待するかにもよりますが、うちのセンターでも話していて私はアドミッション・オフィサーですか？そうじゃないですか？という話をしているアドミッション・オフィサーとはどのような人材かの議論をしています。山本先生の話を知っていると、アドミッション・オフィサーだろうな、と思います。そういう意味である程度機能的にアド

ミッション・オフィサーとして仕事している方は何名かすでにおられると思います。ただ、アメリカや韓国の入学査定官のように、評価に携わるかどうかは微妙なところかなと思います。

将来の雇用については大学から認知を受けている訳ではありませんが、今働いている人たちをアドミッション・オフィサーと呼ぶか呼ばないかは別として、きちんと入試に関わる業務として権威のあるポジションに付けていただこうと考えているところです。それからコンテンツですが、入試データの分析については、私のセンターは入試改革部門のほかに教育改革部門と高大接続部門と国際入試部門と4部門があって、教育改革部門はいわゆる教育IRの機能になっております。ここは入試改革部門と連携して入試データや入ってからさまざまな調査や学籍情報、卒業してからのデータを一貫して扱える体制になっておりますので、プログラムの中にも入試データだけでなく、入学後の成績データと結びつけて分析するようなクラスも予定しております。入試と入ってからあるいは卒業してからのデータと入試データを結びつけて分析することによって、採りたい学生を採れているか、入って活躍できているかという見直しにもつながりますのでそうしたクラスは正式にプログラムを運用する際にはそういうコマも作ることを予定しております。

(藤田)

ちなみに1回目2回目のプログラムを受けなくても3回目だけ受けるというのはありますか？

(川嶋)

実を言うと1回目と2回目は結構リピーターが多かった。ただいろいろのプログラムの質を保証するためには40名限定というふうに決めておりますが、別に1、2回目参加されなかった方でも基本は早いもの順で受け付けていますので可能かと。ただ、これまで提供していたプログラムの事前学習という形で、Eラーニングで学べるようなしくみにしているのです、それをきちんと受けて自分で理解していただければ3回目からの参加も可能かと思えます。

(鈴木)

私の方から質問します。松村様に2件。まず一つ目。松村様、スライド25ページ目のeポートフォリオ活用イメージのアドミッション・ポリシーは配点を決められるのか。決められた場合信頼性をどうするのか、ということが質問の主旨でございます。二つ目はIB。カリキュラムを外部評価した情報が有用ではないか。高校の学習内容を評価する外部評価者が必要ではないかという質問です。その二つをお願いします。

(松村)

二つ目の質問は私にはハードルが高いので川嶋先生にぜひお願いしたいと思います。一つ目はアドミッション・ポリシーをスコア化できるのかということでもよろしいでしょうか？厳密にはできないと思います。今のポートフォリオと連動するような形でスコア化してやっていくのは難しいと思います。ただ、アドミッション・ポリシーをしっかりと作り、独自のアドミッション・ポリシーに基づいて、独自の評価基準を作ったりアセスメントを作り上げるのは可能だと思います。

(鈴木)

今、IBの話しがございました。私が答えてしまってよろしいのでしょうか？おそらくTOKやEEやCAS、この3つの中で一番有効なのがEEだと思います。書かれた方もわかりだと思いますが、EEは要するにExtended Essay、課題研究ですね。非常に厳しい基準で課題論文を書くわけですが、何を測っているか。どういうコンピテンシーやコンピテンスを見ているか。それに対してある程度マトリックスを書いて落とし込んでいけば、IBのデータというものはある程度使えるのではないかと私は思っています。それから川嶋様に一つ。AO入試枠の30%拡大が指摘されていますが、それで一体改革がうまく進むのでしょうか？

(川嶋)

30%は国大協のアクションプランの中で掲げられた目標ですが、実際に先ほどお話ししたとおり、いわゆる第三期中期目標計画期間中は定員の10%の枠を考えていて、昨年度から始めたAO・推薦

入試の成果を検証しつつ、第4期に向けて10%からさらに拡大するのにかまた別の道を考えるのかというのを考えようということになっております。各大学で30%というのはおそらく第3期中では無理でしょう。というのはご承知かと思いますが国大協の取り組みの中で推薦とAO入試合わせて定員の50%という上限が決められておりますので、私立大学さんのようにそれ以上増やすことはございませんのでリミットは50%まで。実際には筑波技術大学のように特殊な大学ですのでそこは50%近くかな、AO・推薦で採っている大学もありますが、トータルで30%の目標達成は国立大学では難しいのかなとあくまでも個人的な見解ですけども。

(鈴木)

ありがとうございます。阪大アドミッション・オフィサープログラムについてひとつ質問いでしょうか？今日の議論の中で私が非常に心配だったのは、教育課程という言葉、学習指導といいますが特別活動というのが出てこなかったことがすごく気になります。これはアドミッション・オフィサーの役割として、キーワードがどこか盛り込まれているのでしょうか？

(川嶋)

ありがとうございます。当然、今回の問題もあるのですが、要するに高校でどういう指導・学習がなされているのかを理解した上でないと評価できない。もちろん高校の学習内容についてもきちんと学ぶというのは概論か基礎論か、高大接続という観点から当然そういう教育コンテンツもいれるというつもりでおります。実は、某大学のように本当は高等学校の経験者を採用しようかなと考えておりましたが、財源がないということで断念したばかりでございます。

(鈴木)

ありがとうございます。では、松村様に答えていただきます。質問は、今年度より高校1年生全員を対象に地元企業へのインターンシップを企画しています。期間は1日。今求められているコンピテンシーを身につけるためにはどのようなやり

方が望ましいでしょうか？というものです。1日だけの高校一年生の実施はそもそも妥当であるかもお聞きしたい。

(松村)

高校生に限らず、ワンデーのインターンシップがリテラシー、コンピテンシー、思考する力、認知的・非認知的能力を高めることにつながるかというと、それは誰が聞いても1日では難しいだろうと思います。ただ、それがトリガーになって後々の行動が変化することがある。それが大事。大学生のインターンシップの例でいえば相手まかせ、企業任せのインターンシップは何の意味もない。コントロールするのは非常に難しいですが、向こうをコントロールするのが難しいならこっち側がどういう準備をするか、何のために行って何を学んでくるか。実際そこに行ってどういう視点で学んでくるかをきっちり準備することが効果を生むポイントだと思います。

(川嶋)

さっきの鈴木先生の質問にひとつ付け加えさせていただきます。高校の学習課程を知るということでは、私のハンドアウト27枚目のスライドですが、ひとつの授業の柱として高校ポートレート、高校データベースを構築中であります。先ほど山本先生の話にもありましたが、きわめて多様な高校教育の中で、教育課程・学習内容も個々に異なる訳ですから、その中で評価するには相対化する、文脈化して評価する必要がある。とりあえずWEB等から取れるデータなんですけど、2000校くらいの高校のデータを集めています。そういう中でそれぞれの高校の教育課程のデータも入っております。そういうふうには高校のデータを見ながら志願者の書類を審査するというしくみを考えています。この点については各地の大学や高校の関係者の方には高校のポートレート、データベースのさらなる充実にご協力をお願いしたいと思います。

(鈴木)

ありがとうございます。もうひとつ質問が来ています。コンピテンシースキル、21世紀型スキル、その先の教育の目標を考える上でESGがキーワー

ドとなりうるのでしょうか？

(松村)

それに直接関連するような仕事をしたことがないのでお答えするのは個人として難しいですが、将来を担う社会人としての責任性みたいなことを自覚することもコンピテンシーのひとつだと考えられないこともないが、僕はもっと個人軸が大事だと思っていて、誤解されるかもしれませんが、キャリア自律、個人が自律的に生きるための視点をより強化すべきだと思う。グローバルに考えて持続可能に世界が動いていくように働きかけることよりも、個人が自律的にキャリアを築く中で、身の周りに、いかに小さなイノベーションを沢山つくれるかが大事だと思う。

(福原)

ちょっと私の方から。昨年、私が高校生向けに朝日新聞さんと一緒にESGを取り入れたコンピテンシー教育というセッションをさせていただいているのですが、具体的にまさにご説明があったように、ESGというのとコンピテンシーは一見違う軸ではある。しかし、実はコンピテンシーの中で世界的に非常に重要視されている地球市民力、多様性をどうやってともにやっていくのか、次世代をどうやって作るのかというのがコンピテンシーの中で重要なのです。大きい解けていない問題を解こうというのは一定のコンピテンシーを高めるのには有効だと言われているので、ESGを課題にしてコンピテンシーを高めるセッションは高校で十分に可能だと思います。先ほどの質問で、ワンデーのセッションができるかどうかというのですが、スーパーグローバルサイエンスハイスクールの制度設計に関わっていたというのもあって、実は高校の年に1日しかないようなセッションを使ってどのコンピテンシーを伸ばすのかという研究していました。1日で変化するのは不可能です。ただし、その課題の1日で行うインターンシップがどのようなコンピテンシーを明確に伸ばすのか、学生にとって、想像力を伸ばすとか課題設定力とか抽象的過ぎて理解できない。それをループリックまで落とし込んで、事前学習をしっかりとさ

せて、インターンシップをさせてコンピテンシーに関する他の人からの相互評価をしっかりと入れて、終わった後にそのコンピテンシーを今の評価はこうだからどのように伸ばそうかという3カ月から4カ月のプランを作る、というところまで事前・事後まで考えれば1日のインターンシップの意味はある。この1日のインターンシップがなければ事前事後を組み合わせることができなくなるので、そう簡単にはなくなってしまう。そう考えれば1日でもやらないよりはやった方がいい。

(鈴木)

例えば独創性を育むために高校一年の選択を生物、徹底的に顕微鏡を見させて正確性にこだわらせる。コンピテンスを徹底的に教える、というイメージでいいですね？

(福原)

本当におっしゃるとおりで、独創性というのは抽象的すぎる。当然その詳細を見ないといけない。例えば課題設定というのであれば、情報収集、情報分析、そこの本質理解があって、ループリックのレベルでどこまでできるのか、というのを学生にしっかりと先に見せて、そこからこの課題はこれを意図的に上げようとしていて、あなたはこの課題をやったらどのレベルまでできていたよということを探点を返してあげて、次の3カ月間何をしようかという開発プランと一緒に作るというのをセットにしてあげる。

(藤田)

だいたい時間にはなっているんですけども、最後に今日のパネラーの方以外に、私ども北大のアドミッションセンターにいただいている質問についてお答えします。まず、ひとつめ。多面的・総合的評価に基づく選抜に向けて現在の北大はどう考えているのか？

二つ目は、英語の4技能、外部試験について北大はどう考えているのか？

まず、総合的評価に関して、国大協の30%目標もあります。我々としては入試のための勉強ではなくもっと長い目で見て力になるような入試であってほしい。それが逆に高校の教育現場への

メッセージになると考えています。あまり具体的には申し上げられないのですが、まさにそれを議論している。どこの入試区分にどういう形で入れるか、ということを議論しています。その中でAOに関しては少し具体的な検討をしています。

(鈴木)

今、私からは話せません。AOという言葉を早く止めたいと思っているのと、AOに近い入試をあるいは既存のAOを少し修正する形で実施したいと思ってデザインしているところです。来年のこの会では少しお話できるのではないかと。それまでちょっとお許しください。

(藤田)

それに関して、こういう入試制度が高校生活をどう送るべきかということに影響するのでその方針が決まった場合は各校、決まれば速やかに丁寧に説明願いたいというコメントをいただいております。

(会場)

いつの入試からか？それも発表できないのか？今の高校1年生はもう入学しているので我々としては待たなし。今の1年生に関係するかもすごく重要で、それはいつ頃発表されるのですか？

(藤田)

それは影響しないような時期と考えています。

(会場)

もう影響している。今の1年生はもう教育課程が始まっているので。今の一年生の入試でAO入試の拡充とかある予定なのですか？それともないのかははっきりして欲しい。

(藤田)

今我々が基本に考えているのは34年度入学をターゲットにしたい。一般入試に導入する場合ですね。AOに関しては前倒しもありうる。現時点ではそのくらいしか言えません。

それから二つ目の英語に関してはまず、使うか使わないかはこれも議論中ですが、基本の方向性としてはやはり使う。4技能英語の成績そのものを合否の加点方式で加えていくということは現実的には難しい。文科省のどういう外部試験が使用

可能かという一覧がありますが、その中で何種類もあってどれがどの性質を持っているかは必ずしも大学入試の視点からは評価が定まっていない。加点方式の利用は難しい。ある一定の基準を満たした方が資格のような感じで使われるというのが一番本当のところじゃないかと思っています。これはあくまでも中間的なところです。一番影響のあるところは議論中ということでございます。

(鈴木)

AO入試は評価を変えようとしています。今までは個人面接を集団面接にしよう、面接も色んな形で使う、その合わせ技で使う。基礎にしながらそれを使ってデザインしていく。それを使って従来の高校の査定ではほとんど影響はないだろうと考えております。

(藤田)

もう少し今のことに関連して、多面的・総合的の評価について、公平性客観性に不安を感じる。例えば進学校と地方の高校と、進学校でない高校からの願書が出された場合に進学校出ないと評価されないのではないか？という質問がありますが、もちろんそれはあり得ない。ある一定の評価基準によって判断することになります。少なくともこういうことは心配いらないと思います。

それから昨年度のフォーラムで多面的入試を後期日程の中に導入していくという話しもあった。その結果で後期で勝負しようとしている学生がチャンスを失うのではないか。後期に関しては昨年、例えばというようなことで申し上げただけで、後期といってもいろいろな文系・理系、入試区分がございますので、その区分によって変わる。必ずしも後期に固定して考えているわけではない。

だいたいこんなところでいただいた質問は以上で、時間が10分くらい予定を過ぎております。十分答えられていない部分もあり申し訳ありませんが、今日のパネルディスカッションを終了させていただきます。

パネラーのみなさま、どうもありがとうございました。